令和６年１２月１９日

由利本荘市総合教育会議

議　　事　　録

□日時

令和６年１２月１９日（木）　午後３時

□場所

由利本荘市役所　４階　正庁

□出席者

市長	湊　　貴　信
教育委員会教育長	秋　山　正　毅
教育委員会教育長職務代理者	佐　藤　道　昭
教育委員会委員	小　坂　綾　子
教育委員会委員	佐　藤　美　帆
教育委員会委員	嵯　峨　泰　治

□案件

１．市長あいさつ

２．報告

３．意見交換

(1) 社会的自立に向けた児童生徒への支援について

(2) 子どもたちへの教育について

４．その他

（事務局職員）

総務部長	髙　橋　重　保
教育次長	熊　谷　信　幸
総務課長	小　番　正　明
教育委員会教育総務課長	三　浦　雄一郎
教育委員会主幹兼学校教育課長	倉　田　和　人
教育委員会生涯学習課長	三　浦　啓　助
教育委員会本荘教育学習課長	佐々木　　錬
教育委員会中央図書館長	越　川　憲　光
教育委員会学校教育課長待遇	東海林　早也加
教育委員会学校教育課参事兼課長補佐	佐々木　綾　子
教育委員会教育総務課参事兼課長補佐兼総務班長	佐々木　夢　司
総務部総務課参事兼課長補佐	工　藤　　将

（開会　午後３時）

小番総務課長　それでは、ただ今から、
「令和６年度　由利本荘市 総合教育会議」を
開会いたします。
はじめに湊市長より、あいさつを申し上げます。

湊市長　開会にあたり、一言、ごあいさつ申し上げます。
本日は年の瀬の大変ご多忙のところ、ご出席をいただき、誠にありがとうございます。
また、皆様には、日頃より、市政の推進に、深いご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。
中でも、教育行政の推進につきましては、日夜ご尽力いただいているところであり、重ねて御礼申し上げます。
はじめに、本年この七月、本市を襲った豪雨災害について触れさせていただきます。
この度の災害は、市内各地にこれまでに経験のしたことのない甚大な被害をもたらしました。
現在、市役所全庁を挙げて復旧に取り組んでいるところでありますが、今後の見通しについては、被災箇所数が膨大なこともあり、三年程度はみないといけなのではないかと感じているところであります。

今後の復旧・復興に向けては、地域の皆さんのご協力がなにより重要でありますが、本日ご臨席の皆様にも、お力添えを賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて来年は、由利本荘市が誕生してから二十周年の記念すべき年を迎えます。平成から令和に連なるこの二十年、地方を取り巻く環境は大きな変貌を遂げました。
特に、急速に進行する人口減少と少子高齢化や、加速するデジタル化などの社会情勢の劇的な変化は、私たちのような大人ですら
対応していくことが大変困難であります。

将来の由利本荘市、そして日本を背負っていく子どもたちには、将来の変化を予測し順応していくスキルや、仲間とともに たくましく生き抜く力が求められます。

こうしたなか、本市では、昨年度、「教育支援センター」を開設し、児童生徒及び保護者、教職員、学校を包括的・多面的に支援してきているほか、引き続き、ＩＣＴ教育や、コミュニティスクールの推進などの支援を充実してまいりたいと考えているところであり

ます。

本日の総合教育会議では、
「社会的自立に向けた児童生徒への支援について」
「子どもたちへの教育について」
の二件を議題に選びました。

これらの案件について、皆様から様々なご意見を頂戴しながら、議論してまいりたいと思っております。
これからの子どもたちの未来と本市の将来を見据え、よりよい教育行政の実現につなげてまいりたいと考えておりますので、本日は、何卒よろしくお願いいたします。

小番総務課長　ありがとうございました。
それでは、次第に従いまして、はじめに、教育長より報告をいただいた後に、教育委員会事務局より話題提供「社会的自立に向けた児童生徒への支援について」の現状等を報告していただいた後、市長と教育委員の皆様による意見交換を行っていただきます。
もう一つの意見交換として、「子どもたちへの教育について」と題して、今の子どもたちには、どのような教育が必要なのか、どのような学習環境がもとめられるのか、などについて、フリートークを行っていただきたいと存じます。
皆様におかれましては、ご自由に忌憚の無いご意見を出していただきたく、よろしくお願いいたします。
なお、話題提供の説明資料につきましては、お手元に印刷したものを準備しておりますが、ステージ側に設置しているスクリーンにも映しますので、そちらをご覧いただければと存じます。
また、議事録作成の関係で、発言する際には、マイクを使用していただきますようお願い申し上げます。
それでは、以後の進行については、市長に行っていただきます。

市長、よろしくお願いいたします。

湊市長　それでは、次第に従いまして、進行してまいります。
２の「報告」を教育長より、お願いいたします。

秋山教育長　それでは、私から何点か、教育委員会としての今年度の取り組みについて、この場をお借りして報告させていただきます。
小中学校では、来週の１２月２５日に冬休み前集会等を行い、２６日から１月１３日まで冬季休業に入ります。

教育委員会の中でも報告されているのですが、今年度の子供たちの交通事故は３件で、自転車の転倒での怪我はありましたが、それ以外は大事に至るものはありませんでした。またそれ以外でも、校内外で大きな事故や事案がなくここまで来ていることは、日頃からの学校の指導や細かな支援、そして地域の見守り活動のたまものであると、ありがたく思っています。

冬休み中、そして今年度最後まで、子どもたちが元気で生活できるよう、重ねて学校には安全指導、生活指導の充実を求めてまいります。

なお、子どもたちの安全に関連し、今年度はクマよけの鈴を市の予算（500 万ほど）で購入し、全児童生徒に配布することができました。幸い、本市においては昨年に比べて目撃情報も少ないのですが、昨日も本荘地域の親川で目撃されるなど安心できる状況ではありません。秋田市の事例からも、油断することなく対応していきたいと考えています。

次に、児童生徒数の推移についてお話いたします。

まずは、現在本荘地域の小学校の再編を進めており、令和８年４月には本荘地域に小学校３校、中学校３校、小中同一の学区として再スタートします。

それとともに、その後の市内全域の学校のあり方についても、今後の児童生徒数の数から考えて、速やかに、しかし丁寧に検討を進めなければと考えています。

具体的な数字で見ると、令和６年度当初の本市の小学校児童数は、２，７６７人、中学校生徒数は１，６５７人でした。本市の出生数から予測する６年後の児童生徒数は、小学校で２，０９６人、中学校で１，３０６人、合計３，４０２人となり、６年間で児童生徒数が１，０２２人減となる見込みです。

今年度の新山小学校児童数は６１０人ですので、それの１．５倍以上の子どもの数が６年間で減ることになります。

このような急激な状況の変化を見据えながらも、通学距離や通学方法、地域における学校施設の多様な活用のあり方等、多面的に検討し、より良い本市の学校教育、地域の活性化を描いていきたいと考えております。

次に、部活動の地域移行に関する現状についてです。ニュースでは神戸市では、市内の公立中学校で部活動を再来年度から廃止し、地域に移行することを表明したようです。一方、国としては移行期間を３１年度まで延長するとの報道もあります。

このような状況の中、本市においては部活動地域移行推進コーディネーターを中心に、各中学校の関係者とスポーツ協会等の関係団体からなる部活動地域移行関係者協議会を開催し、移行についての具体的な進め方について検討を重ねております。また、生徒、保護

者、指導者へのアンケートも行うことで、現状のニーズ等の確認も進めております。
今年度中には由利本荘市の推進計画をまとめ、関係者や児童生徒、保護者の皆様とも共通理解を図りながら、地域移行を進める予定であります。

次に、「ゆりほんＩＣＴ子供の学びアップデートプラン」についてです。
各学校では、ＩＣＴを活用した学習に積極的に取り組み、その実践も重ねられてきています。また、鳥海小学校では、秋田県の指定である「ＩＣＴを活用した授業力向上事業」に取り組み、授業研究会を重ねながら市内はもとより県内全体のＩＣＴ教育の実践研究の推進に力を発揮しているところであります。
なお、本市では情報支援員を各校に配置し、子どもたちの学習でのタブレット活用の支援や先生方の資料作成の援助を行ってもらっています。また教職員の負担軽減の面でも、校内のアンケート結果のまとめ等、様々なデジタルデータ管理などの校務にも専門的技能で効率よく処理してもらっていることから、学校からは大変好評を得ております。

最後に図書館システムのＩＣＴ推進についてであります。
これは、中央図書館の蔵書や資料をＩＣＴ化し、その中央図書館の機能を高めながら移動図書館、地域の図書貸し出しの一元化等を進め、地域住民のニーズに応えていく、「読書のバリアフリー化」に取り組んでおります。本が並んでいるけど人のいない図書室から、活用される図書資料提供のあり方を検討してまいります。その中では、図書資料の活用における検索の利便性や最新の情報を手にできるデジタルの良さと、紙をめくりながら本を読む楽しさや心の落ち着き等のアナログの良さなども含め、それぞれの特徴を確認しながらより良い図書館のあり方を研究してまいります。

なお、ただいまご報告申し上げた内容や、今日の話題となる児童生徒への支援のあり方も含め、この総合教育会議で話し合われたことをベースとしながら、令和７年度に行う、次の令和８年度からの教育大綱の検討に活かしていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

湊市長　報告が終わりましたが、ご質問やご意見はありませんでしょうか。
無いようですので、次に、３の「意見交換」に入ります。
話題提供といたしまして、
「社会的自立に向けた児童生徒への支援について」の説明をお願いします。

倉田主幹
兼学校教育課長

「社会的自立に向けた児童生徒の支援について」教育委員会の取り組みをご説明いたします。

はじめに、支援を必要とする児童生徒の現状について、いくつかの数値をもとにお話いたします。

１．本市における不登校の児童生徒の状況であります。

過去３年間の状況を見ますと年々増加する傾向にあり、その増加率も高まっていることがわかります。秋田県全体も同様の傾向であることも見て取れます。また、本市小学校の増加率が中学校よりも高いことも見て取れます。こちらに数値の記載はございませんが、不登校児童生徒数を全児童生徒数で除したいわゆる出現率をお伝えいたします。令和３年度が２．１８％、令和４年度は２．４３％で、令和５年度は３．１４％という状況です。

次に、２．学校生活サポートの希望者数です。

学校生活サポートは通常学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒に適切な支援を行うことを目的に小学校に配置しております。こちらに数値をお示したように毎年２００弱の希望があり小学校の児童数で除した割合としますと約６％でございますが、年々微増の傾向にあることが伺えます。

最後に３．特別支援学級の児童生徒数です。

特別進学級への入級は毎年教育支援委員会を開催し決定しているところですが、ここ数年の在籍人数は１１０人程度で、それほど大きな変化は見られません。ただ、全体の児童生徒数では年々減少しておりますので、こちらの人数も割合としましては微増傾向にあると捉えております。こうした実態を踏まえた教育委員会の現在の取り組みについて、この後ご説明いたします。

１つ目は教育支援センターによる不登校児童生徒への支援についてです。本市では児童生徒と保護者、教員、学校を包括的多面的に支援するための教育支援センターを設置しております。このセンター内に不登校児童生徒を対象に、個別支援や集団活動を通して学習意欲を高めたり、自立心や社会性などを育てたりして社会的自立を目指すよう働きかける本荘ふれあい教室が開催されております。
今年度は現在、小学生が４名、中学生が１５名の計１９名が通級を希望している状況です。このふれあい教室では、通級生が自分で計画を立てて取り組んでいる教科学習の支援を行ったり、創作活動、スポーツ、社会体験等を通した自立への意欲の環境を促す活動を行ったりしています。具体的には、調理実習や外部講師を招いてのお菓子作り、野菜作りなどの創作活動、市立図書館を訪問しての職業体験、軽運動などとなります。休憩時間などにはカードゲームなどを通じて通級生同士のふれあい活動を進め、仲間作りにつなげております。また保護者支援といたしまして、電話や訪問などによる相談を行っておりますが、今年度からオンラインによる相談も開始し、多様なニーズにも対応できるよう工夫を図っているところです。

課題といたしましては、本市は面積が広大なため、居住する地域

によってはふれあい教室の通級が困難な場合も考えられるということです。今年度の通級生の所属校を見ますと小学校は、新山、鶴舞、尾崎、東由利、中学校は本荘南、本荘東、矢島、西目、大内であり、旧本荘市内の在籍者の割合が６３％という状況でございます。

次に学校生活サポートによる支援についてお話しいたします。

学校生活サポートには生活サポート、学習サポート、医療サポートがあります。学習サポートは、説明の書き取りの支援や確認、用具準備、課題取り組みへの援助など、授業における個別支援や教室移動時の補助や休み時間の見守りなどの生活面や安全面に関する支援またはクールダウンを促したり、児童生徒の相談に乗ったりするなど心理的安定に関する支援を行います。学習サポートは、理解が不十分な学習事項への個別支援を行います。医療サポートは、服薬のサポート授業や休み時間の見守りを行います。こうした学校生活サポートによる個に応じた支援は普通学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒がより良い環境で学校生活を送るための重要な取り組みであると捉えております。

最後に３．関係各課との連携による一貫した支援体制についてです。児童生徒の集約につきまして、以前は健康づくり課、こども未来課、学校教育課がそれぞれ対応しておりましたが、適切な就学に向けて現在では福祉支援課を含めた４課で協力して取り組んでおります。４課が連携して取り組むことで、認定子ども園や保育所、小学校中学校との間で共通理解が図られ、児童生徒に対して一貫した支援を行うことが可能となっております。また教育委員会所属の就学支援員と学校間連携コーディネーターを配置することで講師間の情報共有を促進し、スムーズな連携を目指しているところでございます。不登校児童生徒に関しましてですが、その要因は多岐にわたる上に複雑に絡み合っているため、学校で解決することが困難なケースも多く見られます。さらに、不登校生徒が義務教育終了後に社会との接点を持てなくなり、引きこもり状態に陥ることも強く懸念されております。そこで支援を要する児童生徒および、その保護者等に関する情報や支援内容につきまして、４課による会議を定期的に行い共有しております。こうした取り組みにより就学前から義務教育終了後まで長期にわたる児童生徒への一貫した支援体制を構築しております。

以上で説明を終わります。

湊市長　ただいま説明が終わりまして、この後皆様方から少しいろいろ意見だとか質問等々も含めてお話を伺ってまいりたいと思います。最初、まず教育長からお話しいただきまして、その後、佐藤職務代理代理者、それから小坂委員、その後佐藤美帆委員、嵯峨委員という順番でお話を伺ってまいりたいと思いますので、お願いしたいと思います。

今のお話について、まず教育長からのお話をお願いします。

秋山教育長　はい、わかりました。
私の方からこの最初のテーマである社会的自立っていうことを考えた時に、ものすごく多様な見方があるんだろうなというふうに私は思いました。私自身は、生涯に渡って自分の成長を自覚して、充実した人生を送る、そういう力をつけていく、そういうことが、社会的自立につながっていくのかなっていうふうに思っています。今学校教育課の中からは、支援を必要とする子どもについてたくさんの説明がありました。それは丁寧にやっぱりやっていかなければいけないことだなと思いますけれども、それと同時に例えばですよ、現代では離職率が非常に高くなっています。令和５年発表の３年以内の離職率って、高校新規採用で３７％、大学新規卒業で３２％が離職するんです。離職が悪いことではないんですけども、その次のステップまできちんと進んでいく力を持っていくというのがすごく大切なんだろうなと思います。困難にぶつかった時にこう広い視野でものを捉えて、それから近づく進んでいく。そういうことをやっぱり学校教育の中でも培っていかなければいけないなというふうに考えています。そういう意味での教育のあり方というのは様々なご意見をいただきながら、私たちもより研究してまいりたいなと思っています。 以上であります。

湊市長　はい、ありがとうございます。 それでは佐藤職務代理者、お願いします。

佐藤教育長職務代理者　佐藤道昭です。子どもたちもやっぱり人間ですので、特異性が様々あるわけです。本当に走るのが速い子もいれば遅い子もいる。同様に学業に対しましても算数得意な子、また苦手な子たくさんいるわけで。またずっと座っていれる子また座っていれない子というそういう差が出てくるわけで、それが全て、この支援とか学力とか、そういうものに表れてしまうわけでございます。 昔の先生たちは、なんでこれできないかと怒りながらも伸ばしていた。 それも昔のやり方ですが、今それやりますと問題になりますし、今の時代ではそれはそぐわないかと思うわけでございますので、むしろいつも言っております、褒めながらいい点を伸ばしていく。 悪い点も伸ばせればいいんですが、そこを無理やりこじあけるではなく、機会を待つという教育方向に導いていければと思っておりますので、今の時代はどうしても学力とか点数とかの平均によりまして、その学校や学級、また子どもたちの位置づけというのが決められてしまうんですが、先生方もある程度それは大事なんで。それを気にせずに子ども

たちのいいところを目にかけながらも伸ばしていって。そしてそれが自信となって学校に出てくる。また授業を受けてくる、友達と交流を深める。そういう場を作れればというのが私の理想ではあります。ふれあい教室というのは本当に本市にとりまして、とっても大事な事業の一つであると思います。さらに支援の学習生活サポートの支援の先生方が多く各学校で、この学校の先生方のサポートをしてくださいます。これは本当にありがたいことですので、当然、これにはお金がかかることではございますが、どうにか支援の人たちの増やす意味、これから多分増えてくると思うんで、子どもたちは減ってもこの学習生活サポートは今までと同じもしくはそれ以上に増える可能性はありますのでそういう人たちの雇用の保障と言いますか、そちらもできれば含めてお願いしたいなと思っております。ふれあい教室に関しましても、充実とそして拡大ですね、先ほどの話ありました遠距離からはなかなか来るのは大変だとすれば、また別のところにもう一つ拠点を設けてやるとか、そういう方法も考えられるのではないかと思っております。また他にも様々ありますが、この後でお話させていただきますので、よろしくお願いいたします。

湊市長　はい、ありがとうございます。それでは小坂委員にお願いします。

小坂委員　子どもたちが多様になってきているために、先生たちが様々な対応をしている中でも、どうしても不登校に入ってしまう子どもが今増えている現状だと思いますが、先ほど佐藤道昭委員がお話ししましたように一人一人に上手に対応できていれば、もっとやっぱり不登校を減らせるのではないかと私も思います。

そういう意味で２０年まではいかないと思いますが、１５・６年前に一度不登校のピークがあったんですが、ゆとり教育が始まって、にかほ市にいたころは最大に上がってゼロまで下がったんですね。その時にどうしたかというと、市全体に指示があって１日目の休みは、電話で確認。２日目には家庭訪問ということで、すべての学校はそれを行いました。不登校に入る子どもたちは本当に不登校にならなくても済む、その子の気持ちを理解してあげると、学校に戻ることができる子どもたちも半数以上いると思います。その子たちが不登校の生活に慣れて朝起きなくてもよいことに慣れる、その１週間以上学校を休み続けることで学校に来なくてもいいことに生活が慣れてしまうことを二次障害と言いますが、そうなる前に揺れ動かして、そして子どもたちを学校に戻せる子どもたちは戻した方がいいと思います。そういう面で昨年度も私言いましたが、やはり教育支援センターには来れない、でも教育支援センターに来るためにはそれなりに日数を経て教育支援センターに来ているので、やっぱり１番近い窓口は各学校です。各学校で校内教育支援センターのよう

なものがあって、例えば今課長さんのお話を伺いながら学習サポートが各学校にサポートが５名いますが、この方々は教員免許を持っていると思いますので、そういう名称で、例えば不登校サポートのように、不登校がいない間は教育支援センターで一緒に仕事をしながら、不登校が出てきたという情報が入ったところで、各学校に行って、そしてその電話の相談と、お休みの電話の受付と。それから１番不登校を始めて１週間ぐらい苦しむのは母親です。 この母親の思いを、そういう母親は１時間とか２時間とか相談に時間がかかるので、担任の先生ではとても対応ができませんので校長とか教頭とか学級を持ってない先生たちが行っているのですが、それも複数となるととても対応しきれない状態になっているのではないかと予想されます。 そういう意味で校内の支援センターがあって、不登校サポートの先生がいることでじっくりお話を聞いて、そして子どもの要求を聞いて２・３日で学校に戻れる子もいるので、しばらく心が疲れて休むことで２・３日休むことで学校に復帰することができる子どもがかなりおりますので、そういう子どもたちを見逃さずに、やっぱり学校に引き戻してほしいと思います。その中でいろんな相談していく中で、やはり学習障害だったり、精神障害だったりということで、医療のケアは絶対必要な子ども、各学校に１０人の中の１人か２人は医療を受けなければ絶対なんともできない子もいると思いますので、そういう時にはカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーが医療とつなげてくれたりしますので。 そういう面で窓口を一番最初のきっかけになったところで子どもを受け入れて、そして早めに学校に戻すという、そういう対策ができる、そういう体制になることで、今の子の不登校の数を激減させていけるのではないかと。 それがやっぱり先ほど道昭委員がお話しした子どもをゆったりこう受け止めるという体制ができるかどうかということだと思います。 どうぞよろしくお願いしたいと思います。

湊市長　　ありがとうございます。 それでは佐藤美帆委員にお願いします。

佐藤委員　　はい、本日はよろしくお願いします。 先ほど道昭先生からも小坂綾子先生からもお話がありましたが、私、日頃は自営業でお店を経営してるんですが、来るお客さんたちを見ていて、非常に自分の気持ちを話す場を求めてるなということを感じています。 ただ商品を買いに来るのではなくて、お子さんのことであったり、親御さんのことであったり、隣近所には話せないようなこととか、家族の中だけでは解決できないようなことを話しに来てくださる方がとても多いなあというふうに感じます。その中で２０２４年、今年４月に合理的配慮の提供というのが義務化されたことは、皆さんもご存知のことかと思いますが、このことから、私もいろいろこう考えること

があって、思いを待って先ほど定例会の最後で申し上げてしまったんですが、平等と公平の違いについて非常にこう考える、考えを深める機会が増えました。平等とは、私もはっきりとわかって、平等とかを使っていたわけではなかったんですが、平等というのは誰もが同じ能力だ、画一的に捉えて、特性とかを一切考慮せずに、平均的な人物像を思い描いて等しく扱うことだそうです。 私が子ども時代には非常にこういうのは強く感じて育ってきました。 公平というのは一歩進んでいて、人によって能力には差があるということを特性に違いがあるということをお互い認めて、能力を合わせて公正さを持って対応するということでした。どうも私も最近深く知ることができたんですが、なんとなくなんか今まで引っかかってきたことが、ストンと落ちたような気がして、いろんな方とこう関わっていく中で、実は慈悲バイアスというものがあるんですけど、それが働きすぎることも実は相手の成長の機会、自身の成長の機会を奪ってしまうことだって、あまり良くないことだということだったんですよね。その慈悲バイアスが、実は家族の中では非常に働きすぎてしまう。そういうことで不登校のお子さんもお母さんも実はとても悩んでいたりとかするんですね。 ちょっと個人の考えにはなってくるんですが、リスクというのはハイリスクでもいけないんですけれども、回避しすぎてもいけなくて。教育の現場で、ご家族にこういうことを言ってはいけないんじゃないだろうか、子どもにここまで無理をさせてはいけないんじゃないだろうか、という判断に迷うことってあるかと思うんですが、先ほど小坂綾子先生もおっしゃってましたが、１日目登校しなかったらまず電話をかけてみる、２日も登校しなかったら会いに行ってみるというのは実はなかなかできることではなかったりするんですよ。担任の先生もまあ時間がないというのもありますが、会いに行くのを拒まれる方っていうのも一定数いらっしゃるので、そういったところを通じないこともあるかもしれないけれども、先生たちも乗り越える勇気というか、そういうのを私たちは後押ししてあげられる存在でありたいなと思っています。以上です。

湊市長　はい、ありがとうございました。 それでは嵯峨委員にお願いします。

嵯峨委員　はい、社会的自立に向けて児童生徒の支援についてというところからですと、保育園とか小学校中学校の園医校医をやらせていただいている立場から、この行政機関がですね、こども未来課、健康づくり課、福祉支援課、学校教育課、行政が連携をしてくれていることで、実はこの保育園から小学校になる時、この子大丈夫かなっていう子を取り上げ、ピックアップしてくれて、学校でも注意して見

てくれて、成長過程でむしろ伸びていくという子もたくさんいてびっくりしていたところなんですけれども、一方でこの子は優秀だなという子が 学校に来れなくなっちゃうっていうことって、やっぱり結構少なくない。児童生徒の中でも目にすることがあったんです。けれども不登校、引きこもりにもいろんな原因があると思うんですが、まず秋田県の教育レベルが高いって、特に小中学校って高いと思うんですけども、少子高齢化であるからこそ取りこぼしが少ないと思うんですね。背中を押して引き上げてくれて、その中央値が高い状態っていうのを下を押し上げてくれてる部分が中央値が高くて、その成績がいいところにつながっていると考えています。そのなかで学校に行ってさえくれれば、もしくは、ふれあい教室に家族や本人がいければ教育を受けられると。義務教育を受けて、次のステップに踏めるような子は結構救ってくれてると思うんです。もう一つ、行きたくても行けない子っていうのがうちに通院してる子でもいるんですけど、非常に優秀な勉強めちゃくちゃできるんですけど学校に行けない。なぜかというと起立性調節障害で朝起きられないと。 ただ、日中自分で勉強して高校大学に進学していくという子もいましたね。僕の大学の後輩でも、大検を取って入学してきた子いましたけれど、その子たちは集団生活が多いとリズムが作れないんですけど、自分のリズムの中で、例えば朝起きれないから、お昼から起きて夜まで自分で勉強するしかない環境だったんで、それができる子だったんだと思うんですけれども、これは医療でも、なかなか調節してあげられない部分っていうのがあって、そういった本当に優秀な子だけど学校に行けないからどのぐらい優秀かもわからなかったりで自分の意思が、あと家族の協力がないと伸びていけないとか、こういった子たちがどうやって伸びていけるのかなとか考えた時にやはりＩＣＴの活用だろうと思うんですけれども、そういう子以外はおそらく行政やそういった教育の現場で十分救ってきてくれてるんで、あと隠れている引きこもり不登校の子たちがＩＣＴを活用して、あの子たち結構それこそ情報通信を活用して検索能力すごい高い子っている、少なくないと思うんですよね。もしかしたら大人よりも上手に検索してくれるかもしれない。 物事をそのなんでだろうって興味が湧けば、そのための義務教育をどう知識を得ていくかっていうと、例えば２４時間オンデマンドで授業を自分で動画でウェブ授業を受けることができる環境であったりとか、もちろんその中には、家族の協力があって部分セキュリティとかそういった問題があると思うんですけど夜しか起きられないから、夜から朝まで、もしかしたら授業一日分だけじゃなくて何日分も取り戻せるかもしれない。 おそらく行けなくなると次に行くときに自分が追いついてないなと思うからいけなくなっちゃうんで、そこら辺もなんとか今の時代だからだからこそできる方法っていうのは取れたらいいなと、以上です。

湊市長

はい、ありがとうございました。 ここで私も少し、最後また皆さんと話しするなり、教育長にということで、今大変参考になる意見を多々いただきました。非常に難しい、例えば、さっきの話で、２・３日で学校に戻るって、戻すっていう先ほどのお話ありましたけども、この不登校のことについて、これはやっぱり教育長の方が詳しいんでしょうけど、今その考え方なんですが、不登校になってる人を学校に戻すことを目的としていいのか、悪いのかっていうかです。不登校の子は不登校で、不登校でいても、問題ない学習であったり、いろんなことを問題ないような環境を作ることも大事だし。だけども、私もちょっと個人的な感じでやっぱり学校に来れるようになった方がいいと思うんですよ。 あんまりそれを強く言うといろいろまた今批判的な話も出る、なんかそういった風潮があってですね。 これなんでまず、基本的にはやっぱり学校にぜひ来るようになって欲しいっていう思いは基本的にあってですね。さっきの話しあった、まず増えてる、増えててですよ、ちょっと一つ教育長でも、ちょっと担当に教えてほしいんです。どんどんですね、小学校でその今４６人であったり、なんていうんでしょう学校に来れるようになった子ってのもいるんですよね。それって実態ってどんな感じなんですか。ほとんどあんなもんですか、増え続けてるだけ、でもやっぱり戻るようになってる子っていうのもやっぱりいるんでしょうか。

倉田主幹
兼学校教育課長

はい、実際にあの不登校傾向として、まずこういう数上がってきているお子さんの中でも戻っているお子さんもそこまで多くはございませんけれども、いる状況ではございます。

湊市長

そこまでということは、例えば数人ぐらい。ほとんどがやっぱり１回不登校になるとまず不登校。もし、数字なければ。

佐藤教育長職務代理者

はい、完全な不登校っていうのは比較的少ないんです。不登校気味でちょっと日数が多いかなというぐらいの子がいるぐらいで、例えば先生方のうまい具合の指導っていうか、交流によって時々出てくるとか、後半になると午後だけ出てくるとか、そういう子が増えているのは実際、学校訪問で聞いておりますので、他の方でいうところの完全不登校って、まあ比較的少ないんじゃないかというのは私の所感ですが、教育長いかがでしょうか。

秋山教育長

はい、ふれあい教室の中でも、学校にまた行く回数が増えていく子とか、それから来なくなって大丈夫だっていう子の報告もありま

したから、学校の中の不登校の子どもであっても別室で一生懸命やってたりするのから、だんだん増えていって戻っていく、教室に戻っていくという子もいて、やっぱり最初は人との関わり、何かでトラブルがあった時に、それを元に戻して何かのきっかけがあれば少しずつもっていくという、そういう改善のものはそれなりにあります。

湊市長　なるほど、多分、本当この子達って一人一人、理由っていうのは、原因はまあ、家庭環境とかもあったりって、いろんなことがあるかもわかんないけども、なんとなくこれぐらいこうして、もし戻る子っていうかな、そういう子がいたとすればですよ、なんとなくでも対応法っていうんでしょうか、一人一人やっぱり全然違うのかもわかりませんけど、戻った子がこういうことをしたら来るようになったとかっていうのがだんだんこう積み上がっていけばですよ、概ねなんとなく対処法っていうか、対応の仕方ってどんどん増え続けていってるんだけども、そこをうまく、増える子は増えているかもしれないけど、やっぱり学校に来れるようになった子もそれなりにこう増えていくようになってくれればっていうか、そういった、すべて違うんでしょうけど、なんとかその成功例でもない、なんて表現すればいいのか、そういうのがこう積み上がってノウハウっていうんでしょうかね、持つような出せればなという、そうでないとどんどん増える一方で、それとあの先ほどの話にもありましたけども一人一人しっかりとそのサポートしてあげる、ついてあげる、これやっぱり非常に大事だし、褒めて伸ばすもそうでしたし、いろんな悩みを聞くって、なかなかマンパワー的にかなりやっぱり学校環境の人手が足りないという現実もやっぱりあるなかでですね、その辺もやっぱり大変なんだろうなっていうのは思いがありました。いずれにしてもまあこれ全国的にこういった傾向になってきているだろうなというふうに思うんですが、先ほど教育長から離職率っていう話、これもっとずっと卒業して大きくなったからの話なんでしょうけども小中学校の中でやっぱりこういう風にして育っていく子っていうのは高校に行ったとき、なんとなくやっぱり社会に出てからも、こううまく溶け込めなかったりっていうところにやっぱりつながっていくっていうのは心配ですし。市長の立場で言うとですね、由利本荘市の子だけ、子どもたちだけをせめてですね、できるだけそういう、なくなってくれればいいものだなっていうふうには思ったりしたところでした。感想みたいな話で恐縮ですけども、今話を聞いてて、そんなことを思ったところであります。何か、今いろいろな意見を聞いた中で、また皆さん何か、もしどなたかの発言について発言とか質問があるとか、もしあればあれですけど、なにかございますか、特にないですか、いいですか。はい、佐藤美帆委員。

佐藤委員　すみません、市長のお話を受けてなんですが、今はあまり不登校の子を学校に戻そうとか、そういう考えもちょっとタブー視されてきているということだったんですが、もう本当に私個人の見解になるんですが、学校や先生ほど信用できる場所と人はないと私自身は思ってきました。社会にどんなものができたとしても、どんな素晴らしい教育の組織ができたとしても、私自身はこの学校教育制度というのを個人的にすごく信じてきました。なぜかっていうとやっぱりお金儲けではない、私は商業をやっていて、こういうことを言うのもなんですが、そもそも皆さん金儲けのためにこの仕事をしているわけではないんです。もちろん、皆さんの税金からお給料をいただいているわけですけれども、そういった気持ちで教育を目指している人は、とりあえず私の友人たちの中にはいなかったです。 私が出会ってきた先生たちの中にも、そういった人はいなくて、これほど健全の場はないと思っています。まあ不登校ビジネスというか、実際はそういうのも存在します。まあ全員そうではないし、意識しているしていないは別として、困っている人を助けたいという気持ちからなのか、それともその人たちを巻き込んだビジネスをしたいのか、というところは非常に曖昧で危ないところではありますし、私、個人的にはできれば不登校の子どもたちは安全な教育の場に戻ってきてほしいなと思うところでした。以上です。

湊市長　ありがとうございます。なんか他にあれですか、どなたか、発言があれば。はい、佐藤道昭委員。

佐藤教育長職務代理者　度々すみません。 先ほどの不登校を登校に導くマニュアル的なものという話がありました。 私たち、学校訪問に行った時、割とそれ聞いてるんです。校長先生からどうしてこういう風にうまくいったんでしょうかって。そうするととても喜んでお話してくださいます。ですから、そう考えますと、そういう学校にお願いをして、当然匿名ですが事例集でもないですけどね、それはちょっと集めることはできるんじゃないかと。やっぱり若い先生、今はマニュアルの世代になっておりますので、そういうものを見て自分に当てはまるのがあってうまい具合に活用できればというのも、一つの勉強の方法としてはありではないかと思いますが、なにぶんやっぱり個人個人のものですから、そういう点で、デリカシーな点もあるかもしれませんで、その辺を含めてもうちょっと検討しながら、可能であればそういう事例を報告してもらうというのはできるんではないかと思います。

湊市長　ありがとうございます。

他によろしいですか。もしあれば、いいんですけど、よろしいですか。 これ本当ですけど、今教育長も私も行政とかいろんな何か政策的にやる時に、例えば目標を作って、やっぱり作るんですよ。ただ、これがやっぱり、そういうあまり馴染まなくてですね。例えば、さっき２．１％から２．４％になって、今３．１％。１００人に３人の子と、じゃこれをまず３％以下にしようだとかですね、２％以下にしようとかっていう目標って、なかなかこれって難しい、多分こういうことについてはですね、不登校の子を何人までにする目標ってなかなか難しいんだろうなと思うんですけど、そういうことでもぼんやりとでも何かやっぱり目指す先っていうかですね、そういうのもあるとまた取り組み方、もちろん本当どんどん増えていったら、対応することばっかりで、対応っていうかね。まあ半分愚痴でもないけども。そんな思いもあって、できればね目標的な数値的なことかです、そういうのもバーンと打ち出して、これぐらいは戻すんだっていうのを掲げられると非常にいいのかなと思いました。教育長、最後まとめ的なことを少しお願いします。

秋山教育長

非常にまとめるのは難しいんですが。先ほどの皆さんのお話を聞きながら、私自身もとても勉強になったし、学校が一番安全な場所って言われるのはとっても嬉しいです。今やっぱり社会がいろんな多様性を持っていて、家庭もものすごく様々です、そこで生まれた子どもたち、育つ子どもたちに対し一つだけの方向性で行くっていうのは絶対無理だと思うんです。そういう意味で支える側も多面的な多様なもので支えていくというのは絶対必要だと思う。保護者の方も担任の先生と話するのはちょっと苦手だけども、別のところだったらいろいろ話せるとか、そういう人もいるので、そういういろんな手だてをしながら、いろんな前向きな進め方をしていくというのは非常に大切ではないのかなと思います。子どもを支えると同時に保護者も支えながら未来につなげていくっていうのは、やっぱりうちの方向性としてはずっと持っていきたいなというふうに思います。それから先ほどありましたように、その事例、積み重ねてそれをきちんと次に伝えて、それこそ若い先生が増えてきて、そのノウハウを伝授するって非常に難しくなっているということと、家庭訪問が今、非常にできなくなっています。普通の家庭訪問ってものがなくってるんですよ。何かあった時、行っても玄関前出て終わってしまうこともあるので、保護者とのやり取りとか家庭とのやり取りっていうのも非常に薄くなっている状況の中でいろんな家庭っていうか、バックボーンを理解しながらフォローをどうしていくっていうのをやっぱり先生方、若い人達にも伝えていけるように検討してまいりたいと思います。ありがとうございます。

湊市長

はい、ありがとうございます。 そうすれば今度は話題を変えまして２自由討論という感じになりますが、子どもたちへの教育についてですから、本当に幅広いテーマということになりますが、そこについて少しまた委員の皆さんからお話を伺っていきたいと思いますが、今度はですね、順番を逆回しをさせていただきます。私からちょっと話しさせていただいて、その後、教育長、嵯峨委員、佐藤美帆委員、小坂委員、佐藤道昭委員と。

そして私も少し話して最終的に、色々とまたそれについて皆さんからお話を伺って、最後教育長にまとめてもらうというふうに進めさせていただきたいと思います。まず、この子どもたちへの教育についてということで本当に幅広い話になるので、いろいろありますけれども、ちょっと前に私何度かお話をしたことがあったので、聞いたことある方もおられるかもわかりませんが、私市長なので、由利本荘市の子は他の市町村の子よりもちょっと秀でたものがあればなっていう思いをまず持ってます。どういったことがいいのかって大きく２点ぐらい。これはもう私市長になった時にすぐに教育長にもこういうふうにしてほしいという話をしたことなんですが、まず２点言うと、英語の力をつけてもらうということと、ＩＣＴの力をつけてもらいたいっていう話を、由利本荘市の子は他の中学校の子よりはというような話をしました。これ何かっていうとですね、将来的にはずっと先になりますけども、子どもたちが将来高校出たり、大学出たりして就職とかになった時に英会話、まあ日常的な英会話ができるよだとか、ＩＴの関係パソコンなんかもちょっとみんなよりも自分が詳しいよっていうスキルがあると一気にいろんな職業に就くにあっても選択肢が広がるって言うんでしょうか。いろんな場面がきっとあるだろうなと思ってですね、やらせたいなというふうに思っています。将来的に英語もＩＴも全く使わない職業というのもいっぱいありますから、別にその職業につけということではないんですけども。実際ですね、私市長になってからも特に思うんですけど。先般もですね、観光インバウンドでタイに行ってきました。タイの旅行業者の皆さんにトップセールスって、営業マンなもんですからかなり営業してきたんです。やっぱり最後英語なんですね。私は英語は全くダメなもんですから、なかなか思いを伝えれなかったり、向こうの言ってるのをどうも理解できなかったり。通訳を通してやり取りできるんですけども、もう少しちゃんと英語の勉強しとけばよかったなっていうのをとっても思いました。いろんな文法だとか、そういったこともそうなんですが、やっぱり基本的に会話が一通りできればと。スマホ使ってですね、いろんなやりとりをしてみたんですけどもなかなかやっぱりね、翻訳もうまくいかなくてですね。まあ、由利本荘市の子にはぜひ一般日常会話ぐらいはできる子にしてほしいということが一つ、それからＩＴについてもですね、これもよく例で私言いますけども、由利本荘市の子は全員ブラインドタッチが、指を見ないでカチャカチャってやってると。由利

本荘市の子は全員ブライトタッチができるんだとか。これだけでも多分、他の市町村とかよりは少し由利本荘市の子がまあスキルアップというか、ちょっと秀でた能力というか。なので、バンバンプログラムを組むとかそういうことではなくて、ちょっと簡単な画像の処理だとか、今パワーポイントでいろんなものを作らないといけない社会に出てですね。そういった時の見栄えの良さだとか、よりコンパクトな言葉になるようなものだとかですね、そういったことを含めて、ＩＴの能力と英語の能力の力、これについては他市町には負けない教育をぜひやってほしいということでですね、教育長にそういうことを言えばですね、じゃ予算くれるんだなって言われますが、まあ予算はないけどもという話もしながらですね、いずれ私としても、由利本荘市の子にはそんな子になって欲しいななんていう思いを持っているというあたりをちょっと紹介をさせていただきました。 次は教育長少し話しいただけますか。

秋山教育長

はい、そうすれば私の方から由利本荘市に限らず、人口が減少していって、非常に人がいなくなっていく。 この現状の中でやっぱり私はもっと海外からいろんな人が来てここに住んでもらってそういう関わりがいっぱいあるような、そういう世の中になって欲しいなあっていうふうに思います。それには多分、英語の力っていうのは非常に大きいものがあるんだろうなと思います。英語のＡＬＴとかも各学校に配置してますよね、でも私自身の反省としてまだまだその活用っていうのは不十分だし、日常的に子どもとの関わりってやっぱり少ないなというふうに思ってます。そこは委員会としても、今までコロナでいろんなことができなかったのから１年経っていろんなことができるようになったので、もっとアイディアを出してやっていかなければいけないなと。昔だとキャンプ生活とか、いろんなことをイベントをやるときに、そういうＡＬＴの人たちも入ってやったりとかそういうこと色々やれてたので、なんかそういうことをやりながら普段からそのなんていうかな英語を使っていろんなコミュニケーションをするという楽しさを味わうそういう体験とかもっと増やさなければいけないなというふうに思っています。

それからＩＣＴに関しては、教育支援センターでもいろいろ取り組んでやってまして、科学フェスティバルでもそういうコーナーとかをやっているんですけれども、まだまだ不十分ですし、もっといろんな視点から突っ込んでやっていかないとダメだろうと思うので頑張ります。

湊市長

はい、それでは、嵯峨委員お願いします。

嵯峨委員

はい、私も秋山先生おっしゃったように、今年の途中からなので中学校の学校訪問二つしか行けてないんですけれども、ＡＬＴがもったいないなというふうに思ったのが正直なところありまして、せっかくＡＬＴがサポート先生みたいに回っているっていうのはもったいないと思うんで、せっかく学校にいる日はＡＬＴが主役の全員参加型の公用語、この時間は英語ねみたいな、あの環境におければ、もっともうちょっと子どもたち英語に抵抗なくなるのかなというふうに思いました。それとＩＣＴの活用ですけれども、先ほどもちょっとお話をさせていただきましたが、子どもたちがＩＣＴを活用できる授業というよりかは、現状では先生たちがパソコンを使う授業っていうふうに見て取れたなと数少ない学校訪問の中では思いましたので。パソコンに対して自分たちが持っているタブレットで答える、その統計を返すとか、せっかくやっぱり情報通信技術でいいのは統計がすぐ取れて、それを伝えられることだと思うんで、子どもたちがどうやって物事をパソコンで検索するのかとか、そこからどうやって深掘していけるのかとか、そういうふうな方に興味が向けるようになってくれれば、それこそおそらく世の中の頭の良さって検索能力の高さのことを言うんだと思うんで。ＩＣＴを活用した検索能力の高い由利本荘市の子どもたちがいっぱいできるのかなというふうに思いました、以上です。

湊市長

ありがとうございます。ＩＴ・英語にかかわらないことでももちろんよろしいですので。次、佐藤美帆委員にお願いします。

佐藤委員

はい、市長は英語とＩＣＴでなんかこう飛躍できる子どもたちということでしたが、でもこれ総括すると、コミュニケーション能力が大切と言っているのかなと私には聞こえて。英語で思いを伝えたいし、ＩＣＴも今となっては、ＳＮＳとかコミュニケーション手段になってきているので、そういったことであれば、私は思いは一緒かなというところで、コミュニケーションスキルがやはりすごく大切なのかなというふうに思っていますね。今の子どもたち、実際にこう集まって遊ぶというよりは、実はもう家に帰ってクラスのグループラインを繋ぎっぱなしに、ビデオ通話を繋ぎっぱなしにしていて、順番にこう、まあお風呂の入ってる時は入れない、そのグループラインに入らない子はいるけど、もう誰かがそのグループラインに入ってて、こう繋がっている状態で過ごすなんていう中学生もこの由利本荘市には、そういうクラスももちろんあったり、そういうの考えていくと全然学校の中じゃなくて、もう家庭で使いこなしてます。もう大人が止められないぐらい進んでいるというか、どちらかというと私はＩＣＴどんどん活用してねと言いたいので、きちんとしたルールづくりが最も大事になってくるのかなと思っています

ね。危険だから安易に禁止ということではなくて、安全に使う、気持ちよく使う、良いことに使うというふうにまあ子どもたちに早め早めに伝えて教えていくということですね。英語もそうなんですけれど、大人になってしまうとなかなかこう身につかない。ＩＣＴ、私が今念頭においてお話しているのはスマートフォンですけども、その使い方も初めから良くない使い方をしてしまうとやはりそういった使い方も、なんか続けてしまうか、やめるかわからないですけど、発覚するまでは続けてしまうかもしれないですよね。そういったところもあるので、なかなか子どもたちに追いつく方が私たちは大変ですが、それでもあきらめずに子どもたちにこれはこうなんだということを教えて、これはこうといっても、こう本当にこう曖昧なんですが、ＩＣＴを活用する時にもやはり倫理観と道徳心を持ってということを伝えていく必要があるなと、目に見えるようなルールづくりというのが直近の課題ではないかなと思っております。以上です。

湊市長　ありがとうございます。それでは、小坂委員お願いします。

小坂委員　はい、私は５年生から英語を始めるというのは、そしてチャンツなど、こう音楽に合わせて賑やかに言葉の発音の練習をするというのが今行われているんですが、発達段階を考えると、ちょっとやっぱり５年生では引いてしまっている子どももいるというのが実態です。私は、にかほ市で自分の学校でＡＬＴをいただいたとき、ＡＬＴにＴ１になっていただいて、そして１年生から英語の授業していただいて、６年生まで全部自分の学校ではＡＬＴの方にやっていただきました。その時に気づいたのはチャンツなどのあの賑やかな英語の学び方はやっぱり低学年の学び方だということで。本市では幸いなことにＡＬＴとＩＣＴ支援員がいますので、ＡＬＴの方に例えば１年生は５分の動画を１０本作っていただいて、チャンツで言葉遊びの動画を作っていただいて、それを支援員に子どもたちのタブレットに入れていただいて、それを自由に使える、目的はネイティブスピーカーの発音に耳を、聞き取る耳を育てる、そういうやり方だったら、今すぐできる。ＡＬＴの方々はいつもＴ２でやっぱりちょっと力を発揮しきれてないのではないかなというところもあります。それぞれの能力を持ったＡＬＴの方々がいっぱいいて得意のことを発揮していただくととてもおもしろい動画ができると思います。そういう面でＡＬＴの方々に１年生から４年生、自由に子どもたちが自分のタブレットを開いて好きな時に聞ける、そういう動画を作っていただいて。例えば一番最初、私は１年生でチャンツで５分間で、もう１０本、２年生は挨拶だけで１０分間の１０本とか、３年生４年生になったら会話になったりで、４年生になったら本市

の素敵なところを紹介する。そういう言葉を入れていただいた動画を作っていただいたりしてで、評価はいらないので教育課程には入ってませんので、例えば、自由な時間に自分の好きな時に見るということで、本当に目的はネイティブスピーカーの発音に耳を育てる。それだけをやっておくだけで５年生になってからも急にチャンツ習った時のあの引く雰囲気は逆になくなるのではないかなと思います。やっぱり思春期に入って反抗期に入った子どもが急にあの幼稚園の子どものように弾み音楽の中で発音しなさいと言われても恥ずかしくて発音できない子も実はいるんですね。でも私たちが訪問した時は素直な子どもたちなので頑張って口を動かしてくれている。そういう子どもたちを見ると、申し訳ないなと思いながら授業を見たりする時もあるんですけれども、だから本市が本当に市長様がやる気があれば、今の状況でやれるのではないかな。とにかく英語に耳を育てるってことはとても大事なことなので、そんな風にして本市の子どもたちが１０年後にはみんなネイティブスピーカーと会っても動じないで聞き取れる、もし聞き取れなくてもスマホを使って伝えられる、コミュニケーションが高まる、そんな子どもたちっていうか、大人が育っていけると嬉しいなと思いながらなんか飛び抜けたことを言って申し訳ありません。今お話聞きながら急激に思いついてしまいました。申し訳ありません。

湊市長　はい、ありがとうございます。もう今日からできるということのようですが、今日からできるそうですから。明日から、考えてみてください。はい、それでは佐藤道昭委員、よろしくお願いします。

佐藤教育長職務代理者　はい、それではまず、市長さんがおっしゃいました英語とＩＣＴに関しまして、私の方からもなんですが、英語に関しては今先生方お話しましたとおりなんですが、私実はＡＬＴの使い方がちょっと違うんじゃないかと。先生が読む代わりにＡＬＴが読んで、発音だけはネイティブな発音を聞いて、普通の授業しているのが現状ではないかと思うんです。正しくない使い方といたしましては、ＡＬＴには文法云々関係なく、先生関係なく、本当生きた会話を子どもたちとしてもらう。それを一つの授業にしてもらう、ちゃんとした授業ではちゃんと日本人の先生が文法とかスペルを教えるとか、その辺をちゃんとやらせる。その二本立てにすれば、この会話に関しては耳も慣れるし、それに対する反応とかで割と単語の、多分会話になるかもしれませんが、それでも実際にはそれが一番使える会話なんですよ。文法云々よりもそういうのがあってもいいんじゃないかなと思ったのは一つです。ＩＣＴの使い方ですね、これはブラインドタッチに関しましては、学校を見てみると一つのクラスに１人・２人はブラインドタッチやってる子いるんですよ。考えると大体５

％ぐらいの子がブラインドタッチできているような感じに見受けられます。これ中学校で小学校はそこまでいきませんけど、中学校になるとそういう子が増えておりますので、本当ＩＣＴに関しても、これは結構いいことだと思いますし。また、パワーポイントの使い方の今の子どもたち小学校から上手に使ってますね。そういう子は何人かいます。これはたぶん１０％くらいかもしれませんけども、でもそれだけちゃんと成り立ってきていますので、まだ始めて数年ですから、これからどんどんどんどん積み重ねてくるとパワーポイントと、それからエクセル関係はとても子どもたち上手に使えるようになってきていると思いますで、しかもブラインドタッチは今ね、ありますよね、確か点数とか出るのがありますので、それで遊んでもらって、どんどん子どもたちは増えるんじゃないかと思っています。ただ、私はパソコンで検索したものが記憶に残んないんですよ。その都度検索してとっても便利ですけども、その後１年後ぐらいにそのことをもとに話をしようとすると、またもう一回検索して結局２・３日で記憶から消えたんですね、フラッシュメモリなもんですから。それで子どもたちも多分同じようなもんだと思います。でもやっぱり検索が大事だというのがあると思いますので、ぜひともパソコンを大いに使っていただきたいと思っております。すみません、それ以外のことでちょっとよろしいでしょうか、コンパクトシティというと結構なりますが、その街中自体は変わっておりませんが少子化進んでおりまして、学校の方も今回また小友小学校それから子吉小学校、今の鶴舞小学校も使わなくなってしまいます。その時にその学校の後をどう利用するかというのは、これから早急に考えていかなければ、もう２年後、２年後じゃない１年半後の話になりますので、そこを真剣に協議して地域と考えながらやっていく必要があるんじゃないかと思うのが一つと、また先ほど言いました少子化によりまして、これ以上多分学校を減らすことはできないと思います。今の現状では東由利とか鳥海とかその辺も少ない人数で学校をやっていく可能性が大きいと思うんですが、そうなった場合にも複式学級に対する対策です。これいずれ必ず出てくることですので複式学級に対する地域住民の考えと、それからそうなった場合の理解ですね。そこを求めていく必要があるんじゃないかなっていうのが大きい喫緊の課題としてこれから頑張っていただきたいと思っておりますし、私たちも無い知恵を絞りたいと思っております。最後のもう一つなんですが、あの何年も毎回言ってますが、給食費の無料化をどういう風に進めていけばいいのかなと、今回また給食費が値上がりするもんですから、今日も特に考えました。それを無償化すると結局市の負担が増えてしまうというのは当然わかります。 しかしながらその捻出する方法をみんなで考えながら、その無償化に向かう方向でちょっと考えていきたいなと私たちも思っておりますので、よろしくお願いいたします。 以上です。

湊市長　はい、ありがとうございました。 今、一通り皆さんから色々と話を伺いました。いろんなお話を受けて、何か皆さんからあれば特に大丈夫ですか。はい、どうぞ。

佐藤委員　ちょっと皆さんに聞いてみたいことがあるんですが、聞いてもよろしいですか、皆さんいいですか。ＩＣＴの活用ということでパワーポイントのお話がいろんな方から出たんですが、パワーポイントを知ってる方、使ったことがあるよという方は手を挙げてみてください。絶対使ったことありますよね。逆に部下にしかやらせてませんという方いないですよね、はい。聞いたこともあるし、見たこともあるし、まあやったこともあるということで、そうするとキャンバというアプリを使ってるよ、知ってるよっていう方はいらっしゃいますか、キャンバというアプリ。実はですね、今主流になってきているのはキャンバというアプリなんですね。まあ主流といっても、例えばあのプレゼンの現場とか、まあ行政の方ではやっぱりパワーポイントを使われている方が多いと思うんですけども、今流行りのプレゼンをやっている３・４０代の方々はもう皆さんキャンバというアプリを使っていて。もちろんパワーポイントでできることもあるし、キャンバの方が素晴らしいところもあるし。私はどちらかというとパワーポイントで作ったものをキャンバで加工しているっていう形なんですけど、あのキャンバというアプリなのでスマートフォンがあれば作れます。それでプレゼンの準備も全部できてしまうし、パワーポイントで工夫しないとできない、この図面を入れるにはどうしたらいいんだとかやっていることが、キャンバというアプリだともう子どもたちでも、もうプロが作ったんじゃないのっていうものが作れたりして、そういうことがあったりもするので、ぜひぜひいろんなアンテナを張って、多分行政のそういうプレゼンもすごく華やかになるかなと思ったので聞いてみました。ありがとうございます。

湊市長　はい、ありがとうございました、勉強になりました。他に何かあれば。はい、どうぞ。

嵯峨委員　小坂先生のＡＬＴの使い方すごく、ぜひやっていただきたいなと。僕の子ども、下が１年生で上が４年生のそれぞれのとこから始められそうだなっていうのが一点。やっぱり先生がおっしゃったように小さい頃から英語に慣れ親しむっていうのが大切だと思うんではい。それと思い出したんですけど、確かどこかの小学校、中学校だったかな、公立の中学校が人気ユーチューバーを呼んで、一人一人ユーチューブの動画を撮影する真似事ですけどね、世界に配信するわけじゃないんで。けど、自分の番組を作ってみるというような

企画をされた学校がありました。その後にみんな自分の作った動画をプレゼンする機会もあるでしょうし、そこに順位がついたら面白かったんでしょうけれども、そういったＩＣＴの活用、その英語もそうですし、情報通信機器も自分で発信する立場になってみて、その使い方を知るっていうのもあったなと思ってすみません。話してて思いました。

湊市長　はい、ありがとうございます。何か他にありますか。はい、いろいろと話を伺いありがとうございます。本当に明日からできるっていうそういうこともご提案いただきまして、いずれＩＣＴについては本当に子どもたちの方がかなり進んでいると全くその通りです。私、これ前も話ししたことがあったのですが、私、２０年ほど前にＰＴＡ会長、小学校か中学校の卒業式か入学式の挨拶の時に「情報化社会で生きるには」っていうことを話ししたことあったんですが、それは何かというと嵯峨先生の話を聞いて思い出して、世の中情報がいっぱいある、それこそヤフーでも検索するといっぱい情報があるじゃないですか。その情報をうまく利活用するだとか、検索するっていう情報を得るということ、これ、情報社会で生きるには大事だというのはその通りなんですけど、逆にそれぐらい情報が世の中にあるっていうことは、それだけ情報出してる人がいるということだと。これからやっぱり情報を出せないとやっぱり埋もれていってしまうというような話をしたことがありました。そういう意味でユーチューブとかＳＮＳとか、そういった情報の発信もそうですけども、その時、私が一つ例として言ったのが、小学校の卒業式の時で今中学、高校だったらちょっと今度次の学校に行った時に、やっぱり中学校の卒業式ですね、高校に行った時に、多分みんな知らない人たちと一つのクラスになった時に、例えばあなたは野球部だった野球部だとしてでですね、新しく高校に行ってクラスがあった時に、例えば道昭さんが野球部、中学校で野球部やってて、でも野球部だってわからないわけですよ。初めて会うので、それで誰かが道昭さん、ちょっと走るの早いですかって例えば聞かれたときに、いや、陸上部だったわけでもないし、そんな得意かって言われるとあまりなのでと、例えば答えたとすると。これは違ってないんですよ、そうすると私には道昭さんは走るのが苦手な人ってインプットになります。なるんだけども、その時に走るのも得意かって聞いたとき、陸上部じゃないから野球部だったので、野球する範囲で走るのはできるよっていうと、野球の得意な人ってインプットなるわけですね。同じ人なんだけども、その情報の出し方によってこっちのインプットが変わってくるって話をですね、もうちょっとわかりやすく言ったような記憶があるんですけど、言いたいのはそういうことでですね。 情報化社会で生きるっていうのは情報を得るっていうことだけでなく情報をいかに出すかとか相手にその自分のこと、わかるよう

にして出すか、これが情報化社会で生きるには大事なんだっていう話をさせてもらった。ここで力説するほどでもなかったんですけど、そんなことをちょっと思い出してですね。そういったことも子どもたちがやっぱり少しね、情報の出し方、さっきの野球の話で言うとね、これはアナログ的な話ですけどもね、そういうのを含めて自分の情報をしっかり相手に伝えるって、あたりのこと。後もう一つですね、よく最近思っているのは、私も新聞紙は見ますけども。やっぱネットで見る方が多くなっていました。例えばさきがけのオンラインであの紙面じゃなくて文字で見るとですね、みんな同じ。なんていうの、その扱いは一緒です。当然だけどタイトルが一行ずっと、ってポンと押すとある。新聞紙は、一面に扱いが違うんですね。大きかったり小さかったり、それが二面になったり、そういう要するに何が今大事なのかとか、やっぱり新聞紙はわかるんですね。これは今日のトップか、テキストでガーッと並んでるとその大きさの違いが分からないですね。なので、そういったことを少し子どもたちにもですね。ネットで見るのはそうだけど、新聞紙で見るとその大事なところっていうのがわかる。だからよく私アナログも大事だっていう言い方する、そういうことなんです。そんなことも子どもたちに少しね。最後まとめてもらいますですけどもね。給食費の無償化もやっぱり検討を実際やって今３億ぐらいかかってですね。ちょっとすぐできるかどうかも。しっかりと頭にはあってですね、やればなっていう思いはありますが、例えばですよ、そこまで全然議論進んでませんけども、例えば、全員じゃなくて学年で、例えば２人目と３人目からとかですねとかいうの。まあそれもあまりえげつない。ちょっと例えば、なんかそういうやり方っていうかね、そんなことを研究しないといけないかなとは、思ったりはしていました。それでは今の話で、教育長いかがですか。

秋山教育長

他のところで中学校は無償とかもあるんですよね。だからそういうのだと小学校卒業するとただになるとかもあるので、まあやり方はいろいろあるのかなと思います。私たちの方でも研究させていただきます。英語に関しては一番思うのは、私たちがこう若い頃っていうか関わってきた英語ってなんていう、点数を取るための英語だったですよね。それから今変わってきてるのは、やっぱりコミュニケーションのための英語に変わってきていることが、学校がなかなかそれを取り入れられない。あの指導する側としてなかなか取り入れられないっていうのが現状であって、ただ小学校の方が多分柔らかく対応していってるんですよね。そこをもっと変えていくっていうのは、やっぱり私も今後より踏み込んでいかなければいけないというか、いっぱいやっていかなければいけないところだろうなと思いますし、先ほどいろいろなアイディアをいただいたＡＬＴとＩＣＴ支援員を組み合わせた使い方とか、そういう活用の仕方っていう

のはやっぱり勉強していきたいし、現実のものにしていきたいなというふうに思います。ちらっと内輪で喋ってるのは中学校だと例えば朝読書の時間って結構ありますよね、そういう中の例えば一日だけでも朝学活が始まるまで、英語コミュニケーションの日にして、そこは英語だけで友達ともやり取りするとか使う英語を日常化していく、そういうことが取り組みとしてはできるんじゃないのかなっていうのは今検討してる、どこまで今できるかわからないですけれども、校長会の中にも話しながら何らかの形で具体化していきたいなというふうに思っています。それから情報を出すことに関してはもう私たちが学校でお願いしてるのは、学校報とか学校の出来事についてはできるだけ校長先生とかであの情報、学校報っていうか学校ホームページが出るので、その中で出してくださいっていうふうに話をして、それはすごくどこの学校もきちんとやってくださってます。そうすると、その学校の出身のＯＢの方、東京にいたり、他にどこかにいる人からメッセージが来たりして、まあ、こういうふうにやってくれてるんだなっていうふうな情報発信は少しずつですけれども、前向きにできてるなっていうふうに思います。最後に先ほど市長も話しありましたし、道昭さんからもありましたけれどもアナログの部分っていうのもやっぱり非常に大きくて、デジタルって効率よく進むけれども、残らないように脳に負担がかからないのであの脳の刺激には非常になりにくいんだそうですので、脳を発達させる鍛えていくためには、やっぱりアナログ的なところも非常に大切で、そこの使い分けをどうきちんとやっていくかっていうのも、学校教育の方がとても大切になるんだろうなと思いますので、そこら辺も私たちの方でいろいろ検討しながらしっかり進んでいきたいと思いますし、情報発信についてはこれから必須なのですごい頑張っていきたいと思います、以上であります。

湊市長　はい、ありがとうございました。まずは自由討論という形で、子どもたちへの教育について、２番について今また皆さんと色々と話をさせていただきました。今承ったお話を受けてしっかりと取り入れてですね、市の教育行政についてしっかり推進していきたいというふうに思います。ここで大きい３番、意見交換については、ここでまず閉じさせていただきまして、大きな４番その他について、ここも自由にというかいろいろな思いを、思いと言うんでしょうか、話をまたお一人ずつまとめ的な要素でもいいですし、何かお話をいただければと、最後にいかがなもんでしょうか。順番に道昭さんからまた。

佐藤教育長職務代理者　すみません。さっき全部言っちゃいまして、あともう心残り何もない感じなんですが。本当に子どもにはチャレンジする子どもたち、

失敗を恐れない、そして失敗してもそれを褒めるぐらいの教師の度量、それで子どもたちを伸ばしてもらって。本当に由利本荘市いいなという、そういう心を持って地元に帰って先生やるっていう子が増えればいいなというのが一番大きいところです。そういう教育を先生たちにも心がけていただき、私たちもそれを支援できればと思っておりますので、よろしくお願いします。

湊市長　ありがとうございます。それでは小坂委員。

小坂委員　私は、学校の式典等で市長様がご挨拶なさる時に自分がご挨拶なさるメインに今日の子どもたちの一番良いところを最初に褒めてくださっている。例えば、背筋がきちんと伸びていて姿勢がいいねとか、朝の歌声が良かったねとか、そうすると子どもたちはそれ以上に、姿勢を褒められると背筋をピンと伸ばして市長様のお話をお聞きし、そして最後に校歌を歌う時には、もう精一杯歌うという。市長様が来校してくださって、自分たちを褒めてくださるということをとても喜んでいる姿を何度も見ることができましたので、これからもぜひ学校にいらして子どもたちを褒めていただければ。そして市長様のこの英語とＩＣＴに強い由利本荘市民を育てたいということをアピールしていただいて全市でみんなでそんな子どもたちを育てれればと思っております。ありがとうございました。

湊市長　はい、お褒めいただいて恐縮です。佐藤美帆委員、よろしくお願いいたします。

佐藤委員　本日はありがとうございました。実は私はここで何か立派なことをしゃべらなければいけないと思って、いろいろ調べて勉強してきたんですけど、なんかどうでもよくなるぐらい、皆さんと本音で会話できたなと思って、充実の会議でした。ありがとうございました。

湊市長　次は、嵯峨委員にお願いします。

嵯峨委員　はい、様々な角度から教育について意見を僕も、いろんなお話を伺って勉強になりました。それでぜひ英語ができてＩＣＴに強いブランディングがこうできれば、ここの子ども達ってすごいねっていう、どこに行っても。それこそ上手にやった大学あるじゃないですか、国際教養大学。ミネソタ州立大学の分校だった時と比べてすご

いブランディングでどこにいっても就職できるじゃないですか。きっと市長がうちの子たちもそういう風にしてくれるんじゃないかと期待してます。よろしくお願いします。

湊市長　はい、少しプレッシャーを感じながらしっかりやっていきたいと思います。それではここで、意見交換とその他について閉じさせていただきたいと思います。 大変貴重なご意見を多々いただきまして、ありがとうございました。今後ともお願い申し上げます。それでは進行の方を総務課長に戻します。お願いします。

小番総務課長　はい、これまで長い時間にわたりまして、ありがとうございます。皆様の活発な意見交換等誠にありがとうございました。教育委員会と連携して、未来の本市を担う子どもたちのより良い教育環境の充実に努めていきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。これをもちまして令和６年度の総合教育会議を終了いたします。ありがとうございました。

【16:38 終了】